

## 6. 骨系統疾患が疑われた小児上位頸椎奇形の1例

高橋 宏, 山崎正志, 大河昭彦  
新初正明, 橋本光宏, 政木 豊  
赤澤 努, 仲澤徹郎, 腰塚周平  
(千大)

骨系統疾患が疑われた小児上位頸椎奇形の1例を報告する。症例は7歳女児。主訴は約1年前からの歩行障害, 右手巧緻運動障害。手関節以下の筋力が右側優位に低下, 画像上C1後弓形成不全があった。これに対し環椎後弓切除, 後頭骨頸椎後方除圧固定術を施行, 脊髄症状の改善を得た。随伴所見から, 頸髄症発症の基盤に骨系統疾患の存在が考えられた。術式選択に際し, 3次元実体模型を用いた術前シミュレーションが有用であった。

## 7. 大腿骨広範骨欠損に対してアログラフトを用いた人工股関節再置換術の1例

松浦佑介, 原田義忠, 白井周史  
岸田俊二 (千大)

大腿骨近位部広範骨欠損を伴う右人工股関節に対して, アログラフトを用いた人工股関節再置換術を施行した。術後, 股関節可動域, 日本整形外科学会股関節機能評価, (以下JOA score) の改善を認めた。諸家の報告では, アログラフトをもちいた再置換術において生存率, 臨床成績ともに良好な成績を収めている。本症例においても短期間ではあるがJOA scoreの改善が認められた。今後の経過観察が必要である。

## 8. 骨融解像を呈した股関節内樹枝状脂肪腫の1例

石川哲大, 原田義忠, 白井周史  
岸田俊二 (千大)

骨融解像を呈し股関節内に発生した樹枝状脂肪腫の1例を報告する。主訴は左股関節痛である。単純X線骨融解像を認め, MRI上Gdにてenhanceされる腫瘤を認め, 他疾患との鑑別は困難であった。股関節鏡を施行し, 関節鏡所見にて多数の黄色調小葉状腫瘤を認め, 病理にて滑膜下層の成熟脂肪細胞が認められたことにより樹枝状脂肪腫と診断された。摘出術を施行し, 現在術後4ヶ月で再発等は認められていない。

## 9. セメントレス人工膝関節のtibial trayのsinkingの検討

林 志雄, 鈴木昌彦, 常泉吉一  
付岡 正, 宮城 仁 (千大)

## 10. Adenovirusを用いた末梢神経への遺伝子導入

齋藤朋子, 大鳥精司, 国府田正雄  
青木保親, 男澤朝行, 銅冶英雄  
山崎正志, 高橋和久 (千大)

大腸菌 $\beta$ ガラクトシダーゼ遺伝子を組み込んだ増殖欠損型組換えアデノウイルスを坐骨神経およびL5後根神経節に注入し, 術後1週・2週で発現を観察。導入遺伝子は順行性, 逆行性にシナプスを超えて確認された。

今後, 内因性オピオイドや, 神経栄養因子などの遺伝子を導入することで末梢神経由来の難治性疼痛治療に応用が可能である事, また, neurotracerとしても有用であることが示唆された。

## 11. ラット後根神経節損傷モデルでの後根神経節, 脊髄, 脳におけるERK MAP Kinaseの活性化

銅冶英雄, 大鳥精司, 高橋和久  
青木保親 (千大)

ラットのL4 DRGを圧潰してDRG損傷モデルとした。DRG損傷後, 各時間ごとに灌流固定し, 活性化ERKを免疫組織学的に観察した。

DRGではERKの活性化が4時間にわたりみられ, Schwann細胞には1時間以降よりERK活性化がみられた。また, 脳のParaventricular nucleusとSupraoptic nucleusでは2分よりERK活性化がみられた。

## 12. ラット脊髄損傷モデルに対する骨髄間質細胞由来Schwann細胞移植の試み

鎌田尊人 (千大)

今日までにラット脊髄損傷に対する末梢神経由来Schwann細胞移植の有用性が報告されてきたが, 骨髄間質細胞より分化誘導したSchwann細胞を移植し検討したものは本研究が初めてである。その利点は, 移植に必要な細胞数の確保が容易であり, 採取部の合併症が少ない事などである。本研究では骨髄間質細胞由来Schwann細胞移植は軸索伸展を促進し, 後肢運動機能を回復させ, 脊髄損傷に対する有用性が証明された。

## 13. 脊髄損傷におけるMIF (Macrophage Migration Inhibitory Factor) の機能: MIF Knock outマウスを用いた解析

西尾 豊 (千大)

MIF knock outマウスの脊髄不全損傷モデルを用いてMIFの脊髄における役割の解明を試みた。行動学的解析, 組織学的解析, 組織標本の画像解析を行った。結果は行動学的にKO群がWT群に比べ後肢の機能回